別府市 総括会議 ハピカム ミライデザイン会議

大分合同新聞社が、次代を担う若手リーダーと一緒に地域の未来を考えるミライデザイン会議「ハピカム」。その第12弾となる別府市編が7日、同市のビーコンプラザなどで行われた。「基軸深耕」「協働交流」「起業挑戦」の3分科会の議論を経て開かれた総括会議では、各分科会で出された「ミライキーワード」を中心に、別府の魅力をさらに深め発信していく方向性を話し合った。その中では、別府には八湯をはじめとする素晴らしい素材があること、他の文化や外から来た人を受け入れる高い受容性があることが共通認識として確認された。一方で、素晴らしい素材や文化があるのにそれを生かし切れていないという課題も浮き彫りになった。この課題を解決するために提起されたヒントは、情報の整理と的確な発信、素材をつなぐ人の大切さ、コアなファンを広げていく仕組み―など。参加者はこの日出されたアイデアと新たに生まれた連携の輪を今後につなげ、新しい別府の魅力を創造していくことを誓い合った。

■ウェブ　http://www.oita-press.co.jp
■ハピカムフォーム　http://www.oita-press.co.jp/h-come/

主催／大分合同新聞社　共催／別府市　別府商工会議所
協賛／国立大学法人 大分大学　㈱大分銀行　㈱ドコモCS九州大分支店　日本たばこ産業㈱熊本支店　亀の井バス㈱

出よ 素材繋ぐ観光番頭

武器が伝わっていない

田崎　分科会の代表の方に、感じたことを話していただきたいと思います。

木村　別府には多くの素材、武器があるという話になりました。他の温泉地と比べてもかなり数多くの武器を持っているとあらためて認識しました。あるんだけど多すぎてうまく伝わっていない。観光客から見ると、多くの素材の中で何がいいのか分からない。どの世代にそれを伝えていくのか、絞っていくことも大事ではないのかと。来た方をがっかりさせないためには、しっかりと情報を整理して伝えていく必要があるのではないかとのまとめになりました。「別府プライド」というキーワードに結び付いたのは、別府はすごい所だとしっかりプライドを持って伝え直していくことが大切との思いからです。

神　分科会メンバーの共通認識は、別府が温泉文化の中で裸の交流をしていたということ。これは誰に根っこの部分。どのような方でも受け入れる文化が昔からあります。外国の方に限らず、傷病（しょう）軍人や被爆者のための施設もあります。受け入れてみんなを渇で癒やすすべなる文化がある。APU開学でたくさんの留学生が移り住んでさた。何かしら縁があって集まったみんなが心地よく住んでもらうためにどうしたらいいかを話しました。例えば運動会、運動会は日本独特な行事で、前の日からお弁当を作って、みんなで応援して、他の国にはないもの。外国の親技を紹介できるプログラムも入れて開催できたらいいなと話しました。

後藤　テーマが起業挑戦でしたが、観光に関する話が多かったです。話をしてみて、別府はすごく多様性があり、多くの人を受け入れてきた街だと感じました。私は外国人留学生に関わる仕事をしたんですが、留学生の受け入れが多い（ということは全国的に知られている。高齢者や障害者も多く住んでいるので、起業や挑戦の可能性を持った街ではないかなと。例えば別府で事業が成功すれば全国で通用する可能性があるし、世界に展開できる可能性も持っていると思ってます。

一人一人の旅想像する

田崎　並河さんはどう感じましたか。

並河　各分科会分科会がどんな話をしているか知らずに議論しましたが、つながるキーワードもいくつか出ていて、受け入れる土壌があるとか外国人がいても異質に感じないなどの話があり、それをホスピタリティーという言葉で言っている分科会もありました。僕はいろんなまちづくりに関わっていて、たいていうちのまちは老若に厳しいから」って言われるんです。それを考えると自分たちで受け入れる土壌があるって言ってくりゃなんで、よっぽどその土壌があるんだなと。そこは各分科会共通のところかなと。目指すものは違うところもあって、基軸深耕分科会では、良いものをどう伝えていくか、別府のプランディングをどうすべきかの話が出ていました。協働交流分科会は、神さんの話がすごいいなと思って、温泉に入れば裸でみんな一緒で、けんかしても裸になって温泉に入れば最後は水に流すと。異質であっても受け入れる土壌がたみやすさにつながれば、もう一歩進んで子どもの教育につながる意味もあり、さらに混じり合うことで新しいものが生まれるという意味もあるのかなと。そういうことへの期待を感じました。

商店街に共同施設整備

田崎　テーマをくくるとこの話は重要ですね。別府という地が勝手人というアーティストを受容して、その結果できた一つの“化学反応”かなと思いますね。そこに観光生が入ってきてどうなるか。面白そうです。全国的に商店街の活性化が課題になってますが、こんな事例を積み重ねることで活性化のビジネスモデルが生まれないかと思うんですよ。取り組みが発展してビジネスになる可能性はどうですか。

後藤　私は外国人起業家の育成をしたいと考えてきたんです。その中でも商店街は親和性があると思ってます。商店街はコミュニティーが半強制的にできあがるので情報の交換が楽。留学生だけじゃなく、高齢者や若者や女性の起業も増えていくので、いろんな人が集まる起業の場とし て商店街がいいのではないかと思っています。

田崎　商店街を使って具体的なアイデアが出たようですが。

後藤　障害者の雇用を拡大するという社会の要請がありますが、それぞれの企業が雇用するにはいろんな自封まります。商店街の中にインキュベーション施設をつくり、共同トイレや食堂を整備するとか、送迎も何社かが共同でするとで、障害者が通いやすい仕事の場ができないかと考えているところです。

田崎　神さんがアーケードで世界各国のラジオ体操大会や運動会をしたいと話していました。

神　運動会は日本独自の文化。留学生も一緒になってせりやりたいですね。

田崎　やはり留学生は大きな力だと思います。少子化の日本は旅行需要も先細っていくだろうと。そこで別府をうまっつ外国かっの観光客誘致。別府の魅力を高めるために留学生に期待することは何でしょう。

木村　APUの学生さんたちが観光旅館で働いているケースは多いです。各国に別府の魅力を伝えていただいています。今、働き手が足らなくなってきていますが、別府には大きな大学があります。これから海外から誘致するためにAPUがあることは、ものすごく将来的頼みのです。逆にAPUの学生たちから各国の情報を得たい。外国人の方は昼間ビールを飲みながら楽しく散策したい。でも、駅を降りてから飲めるところがないんですね。それが見えない。そういう海外の文化をしっかり教えてもらえる面としても情報交換が必要かなと思ってます。

たどりつくまで橋渡し

田崎　門脇さん（邦明・基軸深耕分科会）に聞いたら貴べ歩きの街歩きもあるそうですが。

門脇　食を使った街づくりをやってる団体で、マップだけ作るのではなく、もう少し踏み込んで自分たちで自分の好きな街を紹介したいます。僕らはテークアウトの店を回って貴べ歩く事業をやっています。残念ながら日本人のお客さんは少ないんですが、JICAからAPUに視察研修に来る方には結構使っていたんです。駅前には泊まるんだけど、日本の食べ物をどこに行ったらいいかっていうことが重要になります。それを観相するためにアラビア語の教室を開いたり、イスラム教の国の料理教室を開いたりしています。

田崎　広く考えると、制約の多い宗教の人たちが暮らしやすい街になれば、かなりの人にとって暮らすハードルが下がるんじゃないかなと。こういうことをやってどんどん受容力を高め、来た人から力をもらうのが方向性なのかなと感じました。

並河　連で考え過ぎれば、「おいで」よりこうお方言はないんですわね。それを使えないかな。「ようこそ」を別府ならではの言葉で言うようなのはないですか。分科会で、日本なんだけど日本じゃないように別府だけは開かれていて、半分日本で半分外国みたいな場所という話がありました。例えばハワイはアメリカなんだけど、アメリカと日本の間くらいという感覚があって、遊びに行くとすごくホスピタリティーを感じられる。逆にアジアの人から見たら別府は日本なんだけど、日本の中でもハワイのような存在にいて見えてくると外国の人も遊びに来たくなったりとか、後藤さんは別府としてこういう目標を掲げてくれるといいなというのがありますか。

後藤　多様性とか受け入れるという中で、こういう街になったらいいなというのを含めてですが、気付いたら自然にいろんな人が集まっていたという意味の「あぁ、おっちょったん」「きちょったん」とか、気張らずに自然に人が集まっていた街になったらいいなというイメージかなあ。

並河　ありがとうございます。そうですね。無理や引き寄せるんじゃなくて、いつの間にか来ている街だと。おっちょったんとはかわいいですね。

情報を整理して発信を

田崎　勝さんの話で面白いなと思ったのは、別府はいっぱいなものがあるっていうことでしたね。

勝　受け入れる土壌があることと、アンテナを持っていたり、それを求めている人にとっては いい所なんです。だけど、若干踏み込まれるのに抵抗があるんとは、別府は中間が強くていきなりディープな世界がどどどーであるんで、分かんない人は分からないし、拒絶する人は拒絶するんですけど、僕にとっては最高です。

門脇　僕はそのA大分市の人間なので、このディープさにいつっちゃうんですよね。ただ、誰か紹介するかがすごく重要で、その間を取り持ちたいなとも思ってるんですけど、続けられる仕組みをビジネスとして回る形にしていくのが課題だなと思っています。

田崎　本田さんはお客さんから「ディープで聞いた」と言われたことがありますか。

本田　うちの宿に来る方はまだ、路地裏とかの情報が来ていないので、いきなりディープさを感じている方はいらっしゃらないですよね。逆に別碧温泉は、ちょっとは珍しいと思うんですが、またまだ街歩きのことを伝えられていない。何より自分が知のないことが一番だと思うんです。みなさんから情報を得て、まずは伝えている人が知らないと外から来た人に伝えられないと思います。

門脇　明碧もディープだと思いますよ。

田崎　堀さんは別府の出身で、お友達にディープなことを紹介するそうですが、その反応も含めていかがですか。

堀　東京からお客さんを連れてきたら、へびんゆ温とか秘湯に連れて行きますね。やっぱり驚いてほしいし。東京から来る人間はきれいなホテルとかイベントとかは見ている人が多いので、大自然に連れて行きたいなと思っています。消まる所はどこを案内したらいいか分からない。僕自身がディープな所を知らないので。きょうもお話をさせてもらったんですが、情報を整理して発信してもらえたら僕たちは探せるのにと思うんです。両親や友達に聞いても分からないので、ちょっともったいない気がします。

プロデューサー役必要

田崎　ディープさを利用した観光資源の開発はできますか。

山崎　ディープさではターゲットが限られてしまいますが、今後別府の新たな魅力を発信、提供していくには、ディープさも一つの切り口になるのかなと。マンションでも隣の人に物をあげたりするそうですが、都会ではないことです。場所もディープさが、人をプレーンなものかなと思います。

田崎　鍵野さんはいかがですか。

鍵野　分科会でも多様性の話がありましたが、ディープのポイントは観光客という視点ではなくて、生活している人が本当に楽しんでいる。だからこそ深く深くなっていく。そういうことが今本当に面白いと思うんですね。観光バスで観光地に連れて来られてもつまらないけど、別府に来ると面白い人がしている面白いことをのぞき見できるんだいな。そこと、ロボケアセンター も滞在型ですので、その案内もできるとか。健康なことと多少不健康な部分もあるけりつつ、興味の度合いではどこまでもずぶずぶ入っていて、好きになってしまい「おっちょったん」というのでいいんじゃないかと思いました。

田崎　キーワードに人が出てきた。ディープさをどう伝えてもらうのか、観衆村は人だ。並河さんの専門のソーシャルデザインは、人を動かさないとできないもの。人を巻き込んで大きなムーブメントを起こすためのアドバイスをいただけますか。

並河　ディープな世界を誰か紹介するから状況 を、誰かつなぎ合わせるかという話が出ましたが、ソーシャルデザインがうまくいく時って、人と人とをつなぐ役の人と、プレーヤーとなって実際に活動する人がうまく連携することが大切。別府はプレーヤーがたくさんいるので、プロデューサーとなってつなぐ人が出てくるといいのかなと。そういうんは肩書が難しくて、意外と職業名がなかったりするので、ちゃんとした職業名があるともっと広がるというのがあって「アメリカで国立公園が盛り上がった時があり、公園を守るレンジャーを任命した。職種として子どもたちもあこがれる存在になったんです。旅館には番頭がいます。案内人となる番頭役みたいな人で、別府○○番頭とか観光番頭みたいな名前を付けて仕事をする人が生まれるといいのかなと思いました。

逆に一切情報出さない

田崎　名前を付けるのはすごく大事なことと。並河さんの著書の中でも、プロジェクトはまず設計図を描き、悩んだら名前を付けてみる。ここが肝ですが、いいなと思った名前には必ず可能性が内包されていると書かれています。

並河　別府なら、「アジアで一番○○な街」ってくらい大きな名前をつけてもいいのかなと。名前が付くと目指すべき方向性が見えてきます。

田崎　ロボケアセンターがなぜ別府にあるのかの話も聞く機会があったんです。

木村　2年前に大阪で100名から アンケートを取り、「大分県行ったことがありますかは」70人が行ったことがないと答えました。別府や湯布院に行ったことないんですかと聞くと、70人中30人くらいが別府には行ったことがあるが、大分県には行ったことがないと言っていました。私は長野県の出身ですが、長野から見ても同じで「大分県に行こう」と言わない。「九州に行こう」と言いますね。九州に別府があることは知っているが、大分県にあることは知らない人が多い。九州に来る方は「県の点検がないんですね。北海道と同じような感覚。その中でも別府はすごく知られている。これは武器なので、みんなが理解し、プライドを持って伝えていかないともったいないなと思います。

並河　別府をもっと使い倒していけば、ブランドが高まるのかな。みんな知ってますもんね、別府って。いっそ別府独立しますか。一つの国として（笑）。

田崎　別府には八湯があり、11の泉質のうち10があるんですよね。別府の名前に引かれて来てみたら、あれもあったこれもあった。そこを見せたいと思うんですね。すごく可能性があると思います。東京から来る人間はさまざまなプロジェクトがあるんだけど、日本の中でもハワイのような存在にいて見えてくると外国の人も遊びに来たくなったりとか、後藤さんは別府としてこういう目標を掲げてくれるといいなというのがありますか。

後藤　多様性とか受け入れるという中で、こういう街になったらいいなというのを含めてですが、気付いたら自然にいろんな人が集まっていたという意味の「あぁ、おっちょったん」「きちょったん」とか、気張らずに自然に人が集まっていた街になったらいいなというイメージかなあ。

並河　ありがとうございます。そうですね。無理や引き寄せるんじゃなくて、いつの間にか来ている街だと。おっちょったんとはかわいいですね。

情報を整理して発信を

田崎　勝さんの話で面白いなと思ったのは、別府はいっぱいなものがあるっていうことでしたね。

勝　受け入れる土壌があることと、アンテナを持っていたり、それを求めている人にとっては いい所なんです。だけど、若干踏み込まれるのに抵抗があるんとは、別府は中間が強くていきなりディープな世界がどどどーであるんで、分かんない人は分からないし、拒絶する人は拒絶するんですけど、僕にとっては最高です。

門脇　僕はそのA大分市の人間なので、このディープさにいつっちゃうんですよね。ただ、誰か紹介するかがすごく重要で、その間を取り持ちたいなとも思ってるんですけど、続けられる仕組みをビジネスとして回る形にしていくのが課題だなと思っています。

田崎　本田さんはお客さんから「ディープで聞いた」と言われたことがありますか。

本田　うちの宿に来る方はまだ、路地裏とかの情報が来ていないので、いきなりディープさを感じている方はいらっしゃらないですよね。逆に別碧温泉は、ちょっとは珍しいと思うんですが、またまだ街歩きのことを伝えられていない。何より自分が知のないことが一番だと思うんです。みなさんから情報を得て、まずは伝えている人が知らないと外から来た人に伝えられないと思います。

門脇　明碧もディープだと思いますよ。

田崎　堀さんは別府の出身で、お友達にディープなことを紹介するそうですが、その反応も含めていかがですか。

堀　東京からお客さんを連れてきたら、へびんゆ温とか秘湯に連れて行きますね。やっぱり驚いてほしいし